

0歳児保育における「人とのかかわり」

— 連絡帳にみる6か月未満児の「人とのかかわり」と保育者の視点 —

Relationship with Others in Childcare for the First Year of Infancy:
Analysis of Correspondent Notebook of Relationship with Others in 6 months
of Age and The Viewpoint of Childcare Worker

青木 弥生

AOKI, Yayoi

Abstract

The purpose of this study is to investigate the viewpoint and support of relationship in childcare for the first year of Infancy. We made analyses of written messages from childcare worker by the corresponding notebook from 2 months to 5 months of the first year of infancy. Founding that infant behavior of relationship of others was regarded as a subjective by childcare worker in the description of notebook. The results suggested that it is important for support of relationship of infant to considered infant as an active and developmental subject.

キーワード：0歳児、人とのかかわり、領域「人間関係」、連絡帳、受動性と能動性

I 問題と目的

1. 保育内容の記載の変遷と乳児保育

平成元年の幼稚園教育要領改定において、それまでの保育内容6領域が5領域に改訂され、翌年、保育所保育指針においても同様の変更が行われた。要領・指針の改訂はおおむね同時期であるが、幼稚園教育要領において保育内容は領域別に記載されていたのに対し、保育所保育指針では幼稚園就園年齢である3歳から6歳においては各年齢ごとに5領域の「ねらい」と「内容」が示され、3歳未満児では、5つの領域を複合的に説明されるという記載の違いがあった。

保育所保育指針において3歳未満児と3歳以上児で保育内容の記載方法が異なるという状況は、平成11年の改定においても変わらず維持された。その後、平成20年の現行の保育所保育指針に改定された際、保育内容は0歳から6歳までの乳幼児をすべて包括した領域ごとの記載となり、同時に改定された幼稚園教育要領と足並みが揃ったかたちになっている。

平成30年の保育所保育指針の改定では、保育内容の記載が新たになり、特に乳児に関する記載が大幅に変更されている。「保育所保育指針の改訂に関する議論のとり

まとめ」(平成28年、厚生労働省社会保障審議会児童部会専門委員会)では、乳児は保育内容に関する発達が未分化な状況であるため、現行(平成20年改定版)の5領域で示された保育内容と、乳幼児の発達の状況が必ずしも一致していないと指摘されている。これは、3歳以上を包括する記載で一貫してきた幼稚園教育要領に歩み寄った形で保育内容の記載が変更された現行の保育所保育指針について、特に3歳未満児に関する保育内容が読み取りにくいという声があることに由来すると説明されており、さらに、前回改定からの10年間で3歳未満児の保育が多様化し、3歳未満の保育の利用率が上昇していることを踏まえ、記載内容を充実させる必要が述べられている。

これらの議論を踏まえ、平成30年の改定では、3歳以上と1歳以上3歳未満の2つの年代に分けて保育内容が5領域ごとに示されるよう変更されることになった。また1歳未満児を想定した「乳児保育」という年代区分が設けられ、この時期の育ちの視点として5領域を複合的に示した視点である「健やかに伸び伸びと育つ」「身近な人と気持ちが通じ合う」「身近なものと関わり完成が育つ」の3つが示されている。3つの視点は5領域との連続性を意識するものとされ、本研究で検討していく領域「人間関係」および「言葉」については、「身近な人と気持ちが通じ合う」視点との連続性を持つものであり、乳児から

の働きかけを周囲の大人が受容し、応答的に関与する環境の重要性を踏まえた記載であると説明されている(「保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめ」厚生労働省社会保障審議会児童部会保育専門委員会, 平成28年12月21日より)。

2. 乳児期における領域「人間関係」の研究の動向

保育内容における領域「人間関係」は、平成元年の幼稚園教育要領改定の際に6領域時代の領域「社会」を継承しながらも、保育が子どもの集団としての「社会」よりも、ひとりひとりの子どもの「人とかかわり」に焦点化する領域として導入された(芦田, 2003)。5つの領域は子どもの発達をとらえる視点として利用されるべきものであるとされているが、それぞれの領域がどのように発達をとらえる視点として利用され、保育実践に還元されているかについては領域ごとに様々な研究がある。領域「人間関係」については、永野(2007)がその研究の動向や課題を検討している。

永野は幼稚園教育要領が改定され、領域「人間関係」が誕生した1989年から2006年までの日本保育学会における領域「人間関係」に関する大会発表件数の分析から、領域「人間関係」についての研究が活発であるとはいえないと状況であることを確認した上で、研究の動向として「子どもの人間関係の発達に関する研究」や「子どもの人間関係の発達と保育者の援助に関する研究」など4種類の視点から理解できるもの大別されること、研究方法としては現場の事例や場面観察、長期間の保育記録や観察にもとづくなど、保育の実践現場において子どもの実態をもとに検討された研究が多いことを指摘している。永野の指摘は「人間関係」を含む保育内容全体の研究状況について、80年代から90年代と時代が進むにしたがって研究が減少し90年代に保育内容やカリキュラムについての研究が十分でないという汐見(2008)とも一致している。

永野による領域「人間関係」研究の動向は、80年代から2000年代の前半に焦点化したもので、その後今日までの研究の動向について明らかにされておらず、これに続く検討も認められない。そこで、領域「言葉」の研究動向を検討した南陽(2017)の手法を援用し、永野の検討対象とされた時期以降(2007年以降2017年までの10年間)の領域「人間関係」の研究動向を概観することを試みた。CiNii(国立情報学研究所・論文情報ナビゲーター)で「人間関係」をキーワードに「保育内容」「言葉」「保育」「領域」「幼稚園」などの関連語とともに検索したところ、合計187件の論文が抽出された(2017年11月1日)。

永野による領域「人間関係」の研究内容の分類である「子どもの人間関係の発達に関する研究」や「子どもの人

間関係の発達と保育者の援助に関する研究」の2つの視点から直近10年間の検索結果を確認してみると、「子どもの人間関係の発達に関する研究」としては森田(2008)、松延ら(2011)金子ら(2012)などがある。森田の研究は4歳児担任による保育実践記録を対象に、子ども同士のかかわりの広がりや協同的な活動につながっていく過程について検討したものである。松延・金子らの研究では、5歳児における友達関係の捉えとその実際について、子どもからの聞き取りおよび事例をもとに検討が行われている。一方、「子どもの人間関係の発達と保育者の援助に関する研究」では、3~5歳児の保育実践事例から子どもの発達にとっての「人間関係」の意義およびそれに対する保育者の役割を論じた上で、子どもの発達の捉え方および保育者の援助の専門性について議論された横山(2008および2009)や、幼児の人間関係の形成過程を幼稚園の3・4・5歳児の観察記録から検討し、保育者の指導について論じた岸ら(2017)などが認められる。

南陽(2017)は、保育内容「言葉」についての研究の動向においては保育現場をフィールドとした子どもの実際の姿に基づく研究が少なく、子どもの実態をとらえ、ボトムアップ的に保育実践を構築していく取り組みを支える研究が不足していると指摘している。一方、領域「人間関係」では、保育現場の子どもの実際の姿をデータとした研究が多いと永野が指摘した状況は、2000年代後半から2010年代に入ってから変わらず、比較的活発に行われていると考えることができるだろう。ただし、先に示した研究がすべて幼稚園の3~5歳児を対象としたものであったことは考慮すべき点である。そこで、3歳未満児の領域「人間関係」に関連する研究について確認してみると、2000年代前半では古橋および森の一連の研究(2002/2003a, bおよび2004)、2000年第後半以降では丸山(2007/2008/2009)や石川(2016)などが認められるものの、幼児期ほど活発な状況とは言い難いようである。¹⁾

前節で示した通り、保育内容の提示のされ方がこれまで紆余曲折を経てきた経緯がある。次に控える改定においても、3歳以上児と未満児を分け、さらに3歳未満児を乳児、1~3歳児と二分して記載するという新たな記載が試みられることになっており、特に3歳未満の乳幼児については未だにその提示のされ方について模索されている状況であるといえるだろう。また、保育内容のあり方を下支える研究状況に目を向けても、幼児期の研究に比較して乳児期についての検討が十分でないことが、今後の課題となっていると考えられよう。

3. 乳児の「人とかかわり」の手がかりとしての連絡帳

認可保育所における保育士一人当たりの子どもの人数配置は、0歳児がもっとも少なく3名、3歳未満児で6名

である一方、3歳以上児では20名、4・5歳で30名と飛躍的に増える。これは、0歳代で特定の大人との情緒的な絆を形成し、1・2歳代では特定の大人との情緒的な絆を土台に周囲の人に関心を広げた上で、3歳以降の子ども同士のかかわりが中心となる生活に移行していくことを裏付けた人数配置であるとされている。

3歳未満の子どもやその保育を対象とした領域「人間関係」の研究が3歳児以降を対象にした研究ほど活発でないのは、永野（2007）が領域「人間関係」の研究手法として主流であると指摘した観察という手法によって、保育者との一対一の関係からそれ以外の他者に広がっていく乳児期という段階の「人とのかかわり」をとらえることの難しさが根本にあらう。乳児の特に早い段階では、「人とのかかわり」として把握しやすい言葉などの明示的な対人行動は観察しにくく、微細なやり取りの中にかかわりを見出すことが必要である。また、保育者との一対一の関係を築くという段階においては、その実践における観察者の存在自体が保育に影響することによる難しさもあるとも考えられる。

永野は領域「人間関係」の研究対象について直接的な行動観察と並立するものとして観察記録を挙げている。遠藤（1992）は、直接観察とその補助として記録機器を用いる観察法の問題を論じた上で、それと補完し合う方法として日誌法、特に連続的な保育実践の記録としての連絡帳を取り上げ、3歳未満児の人とのかかわりの発達と保育者の役割や機能について検討している。本研究では遠藤の視点を援用し、連絡帳を保育者による子どもの行動観察記録として、さらに保育者が領域「人間関係」の視点で発達をとらえていたことを確認可能な実践記録として検討を行うこととする。

そもそも連絡帳とは、保育において家庭と子どもの連携の手段となり、子どもにとっての24時間の生活を視野に入れながら個に対応することが園および保護者に可能とする機能を有しているものとされている（森本・加用, 2015）。これに加え、連絡帳が保護者支援において一定の役割を果たす可能性があるとして、さまざまな検討が行われている（亀崎, 2015、林, 2009/2015）。また高杉（2009）は、1歳児の連絡帳の言葉についての記述の分析から、連絡帳が子どもの育ちの記録として成立することを論じている。高杉の指摘のように、連絡帳を保育の記録として位置づけ検討した研究としては剣持・山内（2005）や西脇（2006）がある。剣持らは連絡帳の分析には子どもの様々な発達課題を探る視点の研究が多いことを指摘し、とくに発達課題の中でも仲間関係や社会的発達など、人とのかかわりに関する検討に用いる利点があるとして、0～2歳児の保育者と保護者の連携を検討している。西脇は、連絡帳の検討を通して人間関係の育ちに

ついて2歳児を対象に検討しており、どちらの研究においても連絡帳が乳児期の検討に用いられていることがわかる。

乳児期の「人とのかかわり」の検討において、連絡帳を検討対象としたものが多く認められることは、乳児における人とのかかわりを把握する資料として連絡帳が有効であることを示唆している。しかし、上記の研究は検討の中心は1歳児以上児が中心である。前節で触れたように領域「人間関係」についての研究において0歳児の「人とのかかわり」に焦点化して検討したのもまたほとんど認められない状況であると考えられよう。

現行の保育所保育指針の「発達過程」では、0歳児の中でも特におおむね6か月未満について独立した区分となっており、ほかの年代区分に比較して特に短い期間の発達に1つの節を割いて特に取り上げられている。また、解説書における「おおむね6ヶ月未満」は【著しい発達】および【特定の大人との情緒的な絆】の2項で構成されている。また、2017年から施行される保育所保育指針の乳児の保育内容の3つの視点の1つが「身近な人と気持ちが通じ合う」から考えても、0歳の中でも特に6か月未満の人とのかかわりについては検討されるべき重要な課題であると考えられる。さらに、育児休暇取得率が上昇し、生後1年以上の休業を経て入園することが増えている一方で、待機児童の多さから保育所入所が困難な地域においては、もっとも入所しやすい0歳児の早い時期から保育所に入所する子どもの保育内容もまた重要な課題であり、0歳児の「人とのかかわり」は喫緊のテーマになっているものといえよう。

4. 本研究の目的

以上の議論を踏まえ、本研究では0歳児の前半であるおおむね6か月未満の時期に焦点化して「人とのかかわり」および保育者の「人とのかかわり」についての視点を検討することから、この時期の領域「人間関係」の実践についての示唆を得ることを目的とする。

II 方法

1. 分析対象

2014年に生後85日（2か月28日目）に保育所に入所した女児Sの連絡帳のうち、入所日から生後6か月になる日までの担当保育者の記述を分析対象とする。入所日から生後6か月に達する日までの連絡帳は64日分記述されていた。

Sの入所した保育所は西日本の県庁所在地にある小規模な認可外保育所である。入所月の入所児は36名で、3歳以上児と3歳未満児の2クラスで異年齢混合保育が行

われていた。Sの所属する3歳未満児クラスは17名で、0歳児はS一人であった。勤務する保育者7名はすべて保育士資格を有しており、3歳以上児クラスに2名、3歳未満児クラスに4名の保育者を配置し、1名がフリーで保育に当たる体制であった。

Sの担当保育者は保育士経験30年以上のベテランで、入所児のうちもっとも低年齢の子どもを中心に担当することが通例になっており、分析対象となるすべての連絡帳の記載を行っていた。Sの家庭からの連絡帳の記入の大半は母親が行っており、部分的に父親が記入していることもあった。

連絡帳は市販のA6版のノートを用い、日付・午前午後の補食・昼食（ミルクの回数も含む）、排便の有無と午睡などの定型の事項に自由記述という構成であった。保護者については日付も含めてすべて自由記述で、保育者・保護者ともに1日ごとの枠がないため、記述量が日々変えることが可能な構成になっている。保護者の記述はノート半分程度から多くて1ページを超える程度、保育者からの記述は定型の事項と自由記述を合わせて1ページから1ページ半程度であることが多かった。

研究協力依頼は、Sの入所した保育所の園長に研究の趣旨および個人が特定されることのない形で分析されることを説明した上で行われ、園長および担当保育者から同意を得た。また、Sの保護者に対しても同様の手続きで同意を得た。

2. 分析

まず、分析対象となる連絡帳の記述のうち、自由記述についてSの保育における「人とのかかわり」が確認できる記述を抽出した。抽出の基準は、基準①「Sに対して他者が働きかけたり応えたりしている」、基準②「Sが他者に働きかけたり応えたりしている」、さらにSの生後6か月未満という月例を考慮し、直接的ではなくとも他者の行為とSの行為との関連性が読み取れるものを「人とのかかわり」として考えることとし、基準③「Sの行為や行動に他者が影響を与えている」、基準④「他者の行為や行動にSが影響を与えている」、基準⑤「特に影響を与え合うことはないが、他者とともにいる」の5つとした。5つの基準のいずれか（複数あてはまることもある）に該当することを条件に、記述をエピソード単位で抽出した。その結果、99エピソードが抽出された。抽出されたエピソードをSの月齢ごとに整理したものが表2であり、代表的なエピソード例を表1に示した。

表2. 月齢ごとの連絡帳記述日数とエピソード数

月齢	連絡帳記述日数	エピソード数
2・3カ月	24	46
4カ月	21	32
5カ月	19	21
合計	64	99

※入所日が2か月と28日目であったため、2・3カ月を合わせて集計している

表1. 「人とのかかわり」のある記述の抽出基準と代表的なエピソード

	エピソード (IDと言及された月齢)*	言及された エピソード数** (%)
Sに対して他者が働きかけたり応えたりしている	ベビーカーにのってお友達の様子をみているとSくん（2歳10ヶ月）が側に来てやさしくなでてくれたりしました。そしていつのまにかおもちゃの（空の）バケツがおひぎの上のせてありあわてましたが、それであそびなさいというようにおいてくれたようでした（ID30-3カ月）	60 (42%)
Sが他者に働きかけたり応えたりしている	眠っている時、私の指を求めてしっかり握って寝ていたのが可愛らしかったです（ID52-4カ月）	68 (47%)
Sの行為や行動に他者が影響を与えている	今日はTくん（兄）がいないのですが、Sちゃんはどうな反応をするでしょうか？ いいこで寝てくれますように！（ID23-3カ月）	5 (3%)
他者の行為や行動にSが影響を与えている	「Sちゃんがねんねしているから、静かにね」というとみんなよくきいてくれます。「賑やかだから静かにしなさい」というより効果絶大です（ID98-5カ月）	5 (3%)
特に影響を与え合うことはないが、他者とともにいる	今ノートを書いている側で、Nちゃん（1歳児）の横でごろんとなって遊んでいます（ID8-2カ月）	6 (4%)

※ひとつのエピソードに複数の基準に含まれる内容が言及されているものも多いが、上記の代表例は1つ基準のみに該当するものを示した
 ※※ひとつのエピソードに複数の基準が該当しているものは、それぞれのエピソードに分類してカウントしているため、総エピソード数と分類されたエピソード数の合計は一致しない

抽出されたエピソードの多くは、複数の基準に該当すると考えられる内容が含まれていた。そこで、各エピソードにおいて該当する基準をすべて確認し、全エピソードにおける5つの基準の該当数をカウントした。また、1つのエピソードの中で複数の基準について言及される際の組み合わせについても確認を行った。

次に、「人とのかかわり」について記述された各エピソードにおいて、それが誰とのかかわりであったかを確認するため、エピソードにおいて関わっていた相手について表3のカテゴリを準備し、全エピソードにおいて関わっていた対象について確認を行った。また、分析対象としたSの月齢を2・3か月²⁾、2、4か月、5か月と3つに区分し、それぞれの月齢でかかわりを持った対象を整理し、対象が大人〔担当保育者〕〔その他保育者〕〔母親〕と、子ども〔特定の子ども〕〔子どもたち〕のどちらであったかについても、かかわりに言及された対象全体に対する割合を算出した。

さらに、Sの「人とのかかわり」における受動性と能動性について検討するため、各エピソードにおける人とのかかわりについて、「Sが他者から働きかけられた」「Sが他者に働きかけた」ことについての記述の有無の確認を行った。「働きかけられる/働きかける」を判断する際にはSの「人とのかかわり」の発達を考慮すると、直接的な働きかけがなくとも間接的に他者と影響を与えていることも「人とのかかわり」とすることが妥当であると考え、「Sが他者の働きかけに応じている、あるいはSが他者の行動に影響を受けている」内容のエピソードを〈受動的〉、「Sが他者に働きかけている、あるいはSの行動に他者が影響を受けている」内容のエピソードを〈能動的〉として、それぞれに該当する記述の有無を確認し数をカウントした。また、「人とのかかわり」においてSの能動性または受動性が読み取れたエピソードの月齢ごとの総数に対して〈能動的〉〈受動的〉に記述されたそれ

ぞれのエピソードの割合も算出した。さらに、エピソードにおけるかかわりの対象においても、表2のカテゴリによって確認を行った。

Ⅲ 結果と考察

1. 「人とのかかわり」として記述されたものとその変化

「人とのかかわり」の抽出の5つの基準と、それによって抽出されたエピソードの典型例を示したものが表1である。また、エピソードは表1の基準のいずれか、または複数の基準に当てはまることを条件に抽出されているため、【エピソード1】のように1つのエピソードに2つの基準に該当する記述があると読み取れるものが多くあった。そこで、全99エピソードにおいて5つの条件のそれぞれが該当したかどうかについてカウントし、全言及数に対する割合を示したものが表1の「言及されたエピソード数」である。

結果、もっとも言及数が多かったエピソードは基準②の「Sが他者に働きかけたり応えたりしている」で、全体の半数を占めており、次いで基準①「Sに対して他者が働きかけたり応えたりしている」が4割を上回っていることがわかった。このことから、保育者はSが一方的に他者から「働きかけられる」だけでなく、「働きかける」様子も積極的にとらえていたことがうかがわれた。

次に、1つのエピソードの中に2つ以上の基準に該当していると考えられるエピソードについて検討を行った。

【エピソード1】(ID65-4 月)

K中のお姉さんが職場体験に来ています。Sちゃんもだっこして貰ったり、声をかけて貰ったりして、にっこり!です。

【エピソード1】は、Sが保育所に職場体験に来ている近隣の中学校の女子生徒に声をかけられるという部分に

表3. Sの「人とのかかわり」の対象のカテゴリ

大カテゴリ	小カテゴリ	
大人	担当保育者	Sの担当保育者（連絡帳の記述者本人であるため、文章から保育者自身がSとの関わっているということが明らかに読み取れるもの）
	担当保育者以外の保育者	担当保育者以外の保育者
	母親	Sの母親
子ども	特定の子ども	名前が明記されており、かかわりを持った相手が明確であるもの
	子ども	複数の子どもたちなど、特定の個人を同定できないもの
その他		上記以外の人とのかかわりがあった場合、その相手

※ひとつのエピソードに複数の基準に含まれる内容が言及されているものも多いが、上記の代表例は1つ基準のみに該当するものを示した
 ※※ひとつのエピソードに複数の基準が該当しているものは、それぞれのエピソードに分類してカウントしているため、総エピソード数と分類されたエピソード数の合計は一致しない

ついて基準①「Sに対して他者が働きかけたり応えたりしている」に該当すると同時に、「K中のお姉さん」に「ニコリ！」と笑いかけるといふSの行為は基準②「Sが他者に働きかけたり応えたりしている」にも該当すると考え、それぞれの基準に該当するものとしてカウントした。このように2つ以上の基準に該当するとされたエピソードが、全99エピソードのうちいくつあるかを確認したところ、99エピソード中45エピソードあることがわかった。3つ以上の基準に分類できるエピソードはなかったため、1つの基準のみに分類されるエピソードは54エピソードであった。また、エピソードが2つの基準に該当する内容である場合、基準の組み合わせについても確認したところ、【エピソード1】のように基準①と基準②の組み合わせで記述されたものが45エピソード中40エピソードと大半を占めていることもわかった。

この結果から、保育者はSの「人とのかかわり」について、Sを他者から働きかけられる側、あるいはSが働きかけた、というかかわり合う双方のどちらか一方の立場として記述するのではなく、一方からの働きかけと、それに対するもう一方の応答という一連のやりとりとしてSの「人とのかかわり」を記述しようとしていることがうかがわれた。人と関係を結ぶことそれ自体がまだ未分化である生後6か月未満のSが経験した「人とのかかわり」を、保育者は双方向的コミュニケーションという文脈でとらえようとしていることのあらわれとして解釈することが可能である。

2. 「人とのかかわり」の育ちの様子

各エピソードにおける「人とのかかわり」の対象を表3のカテゴリによって確認し、月齢ごとに記述されたかかわりの対象を整理したものが表4である。また、[担当保育者][その他保育者][母親]を〈大人〉とし、[特定の子ども][子どもたち]を〈子ども〉とした上で、それぞれ各月齢でかかわった対象の総数に対する割合の推移を図1として示した。

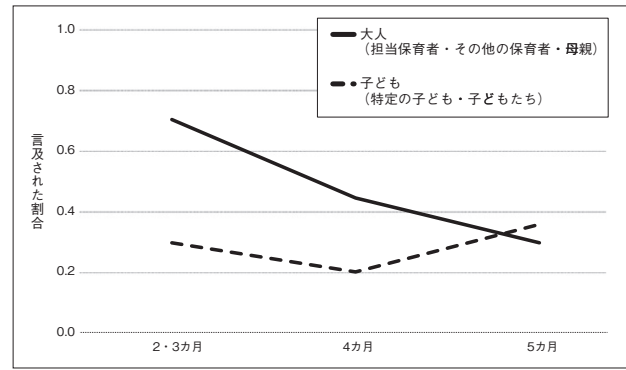


図1. Sがかかわった対象

表4からは、人とのかかわりについての記述でもっとも多かったのが「担当保育者」(連絡帳を記述していた保育者)であることは生後2か月から5か月まで一貫していることがわかる。それに次ぐのは、担当保育者以外の保育者や母親といった大人ではなく、[特定の子ども]や、誰と特定はできない複数の[子どもたち]といった〈子ども〉である。これをかかわりの対象の推移を示した図4で確認すると、かかわりの対象が〈大人〉である割合については月齢が進むに従って下がっていく一方、〈子ども〉が対象になったかかわりは微増していることがわかる。このようなかかわりの対象としての〈大人〉と〈子ども〉の変化について、エピソードに目を向けて検討してみることにする。

図1から〈子ども〉という大きなくくりでみると、Sのかかわりの対象における割合が月齢によって大幅に変化しているわけではないが、一方表4からはSの「人とのかかわり」の対象としての〈子ども〉において、[特定の子ども]とのかかわりについて語られたエピソードが多くを占めるのは2,3か月のみで、その後は急速に語られなくなっていくことがわかる。2,3か月においてSのかかわりの対象が[特定の子ども]であったエピソードを確認してみることにする。

表4. Sの「人とのかかわり」の対象として言及された数

月齢	大人			子ども		その他
	担当保育者	その他保育者	母親	特定の子ども	子どもたち	
2・3か月	22	4	3	11	9	0
4か月	20	0	2	2	8	0
5か月	12	1	0	1	7	1
合計	54	5	5	14	24	1

※ひとつのエピソードに複数の対象とのかかわりがあるとされている場合もあるので、月齢ごとのエピソード数の合計と「人とのかかわり」の対象の合計は同じにならない

【エピソード2】(ID1-2カ月)

(保育者が)抱っこしてみんなの側(1mくらい離れて)に行くと、Tちゃんが「あそば」と言ってくれたり、Yくんがタッチとやって来たり、「あかちゃんかわいい」とYちゃんが言ってくれたりしました。

【エピソード2】は、Sが保育所に入所した初日のものである。担当保育者は3カ月前後の子どもの入園が「久しぶり」として連絡帳に記述しており、6か月未満の『あかちゃん』であるSが、特定の年上の園児から『かわいい』と関心を集め、働きかけられているという記述がこの時期には頻りに認められることから、園児たちにとってSは珍しい特別の存在であったことがうかがわれる。

しかし、このような「特定の子ども」とのかかわりの記述は月齢が進むと非常に少なくなる。これは、Sの存在が時間の経過に従って年上の子どもたちにとって日常のものとなり、保育所の一員として安定的な生活を送ることができるようになった結果として、現れなくなったものと解釈できよう。実際、4か月、5か月で記述された数少ない「特定の子ども」とのエピソードには以下のようなものがある。

【エピソード3】(ID78-4カ月)

1歳のHくんがいっしょにあそんだのですが、互いに気にしながらもそれぞれが自分の遊びをしていました。

【エピソード4】(ID80-5カ月)

ベビーカーにのってみんなの遊びをみていると、YちゃんTちゃんが「Sちゃん」と声をかけてくれ、にっこり！でした。

これらのエピソードは、2カ月のエピソードとは異なり、Sが他者を『気にしながら』であることや、年上の子どもの働きかけに対して『にっこり』と応答するなど、S自身が他者に関心を向けたり、発信をしている姿がうかがわれる。つまり、保育者はSが「人とのかかわり」において能動性を発揮していることについて記録していると考えられるのである。

一方、どの子どもということとは特定できない「子どもたち」として集団の子どもについて記述されたエピソードは2か月で全体の2割程度であったが、5か月では3割以上になっていることにも着目してみたい。

【エピソード5】(ID29-3カ月)

午後からぐっすり眠っていますが、お友達の声でおこされてしまい、眠いのには眠れないよと訴えています。

Sが3カ月の頃には、生活する保育の空間の中にほかの子どもの存在があり、『お友達の声』というともに過ごすほかの子どもの存在やその行動がSの生活や行動によって、Sが『眠れないよ』という状態になってしまうという様子が記述されている。「人とのかかわり」においていわばSが受動的な立場を取っている場面が記述されるとも考えられよう。

一方、4.5カ月の「人とのかかわり」の記述に目を向けると、次のようなエピソードが認められる。

【エピソード6】(ID61-4カ月)

夕方はとても元気です。みんなの遊びをみてごきげんです。みんなも「Sちゃん」「あかちゃん」と言って可愛がってくれます。

【エピソード7】(ID89-5カ月)

お友達の様子をみたり、「Sちゃん」と声をかけて貰ってSちゃんも楽しそうです。

これらのエピソードでは、『みんなの遊びをみて』いるというS自身がほかの子どもの存在に気がつき、関心を向けている様子や、『様子を見た』結果、S自身が『ごきげん』にしているという、他者との相互作用とも解釈可能な視点から記述されている。さらに5か月では次のようなエピソードも認められる。

【エピソード8】(ID99-5カ月)

ほら「Sちゃんがおまるにすわっているよ、Sちゃんの隣のおまるに座る人おいで」と声をかけると、ねおきの悪いひと競ってきて、Sちゃん効果大！でした。

Sの保育所では腰が据わる頃から0歳児もおまるに座る経験を少しずつ重ね、早くからのトイレトレーニングにつなぐ実践を行っている。そのためSもお座りができるようになった5カ月の後半から少しずつおまるに座るようになっていたが、このようなSの姿を本格的なトイレトレーニングが始まっている1~2歳児にアピールすることで、Sを受動的にかかわりを受け止めるだけの存在としてではなく、S自身が行為の主体であり、他者への影響力を持つ存在として年上の子どもたちに印象づけ、認められるよう働きかける保育者の視点と意図がうかがわれるエピソードである。

同様の視点から記述されたエピソードは4カ月、5カ月の〈子ども〉とのかかわりについて複数認められる。「人とのかかわり」がSに対して他者が働きかけることから始まってはいるが、それをSが受け止めたり応えようとする様子や、S自身の行為が他者に何らかの影響を与えるという、Sが能動的にとらえられて記述されており、これは、2,3カ月の〔特定の子ども〕にSが「働きかけられる」という形で受動的に人とかかわるSの姿とは対照的であるといえよう。

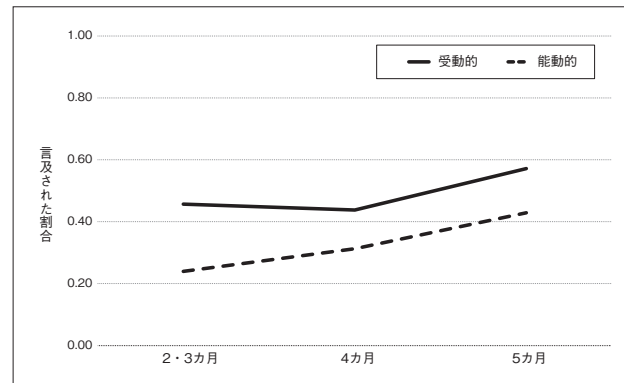


図2. Sの「人とのかかわり」の受動性と能動性

3. 「人とのかかわり」における能動性と受動性

前節ではSの「人とのかかわり」の対象を確認したところ、対象とのかかわりが受動的なだけでなく、能動的にも記述されるように変化していた。そこで、それぞれのエピソードにおいて、Sの「人とのかかわり」における立場の能動性と受動性について確認をしてみることにする。

表5と図2から、Sの「人とのかかわり」において〈受動的〉な様子で記述されたエピソードは、各月齢において5割前後と大きな変化なく推移している。一方で、Sが「人とのかかわり」において〈能動的〉な様子で記述されたエピソードは、生後2,3か月において2割台、4カ月で3割台、5カ月で4割台と一貫して増加していることがわかる。

また、Sが〈受動的〉または〈能動的〉な「人とのかかわり」を行っている際の対象について確認したところ、

表5. 人とのかかわりに受動性または能動性が読み取れたエピソード

月齢	受動的 (他者からの働きかけにに応じている/ 他者の行動にSが影響を受けている)	能動的 (他者に他者に働きかけている/ Sの行動に他者が影響を受けている)	エピソード数 合計
2・3ヶ月	21	11	32
4ヶ月	14	10	24
5ヶ月	12	9	21
合計	47	30	

※1つのエピソードに〈能動的〉〈受動的〉の両方の意味内容が読み取れた場合、それぞれにカウントしているため、エピソード数の合計は表1に示した各月例のエピソード数とは一致しない

表6. 〈能動的〉／〈受動的〉なかかわりの対象

かかわる人		受動的		能動的	
大人	担当保育者	33	67.3%	14	46.7%
	その他保育者	4	8.2%	0	0%
	母親	2	4.1%	0	0%
子ども	特定の子ども	4	18.4%	4	20%
	子どもたち	5		2	
不特定の他者		0	0%	9	30%
その他		1	2%	1	3.3%
合計		49	100%	30	100%

※1つのエピソードに複数の対象とのかかわりがあった場合、それぞれカウントしているため、エピソード数の合計は表5に示した合計数と一致しない

〈受動的〉なかかわりにおいてはその対象の7割が担当保育者であった一方、〈能動的〉なかかわりにおいては、担当保育者の割合が半分程度であることが表6からわかる。また、〈受動的〉〈能動的〉どちらのかかわりにおいても、[特定の子ども]や[子どもたち]などの〈子ども〉が対象になっている割合はほぼ同程度であった。さらに、〈能動的〉な「人とのかかわり」にのみ、かかわりの対象を定めているようには解釈できないいわば[不特定の他者]が対象と判断されるものが3割程度あった。

このようなSの「人とのかかわり」の変化は、発達の視点から理解できる。愛着の発達理論によれば、生後半年程度は、子どもが愛着対象を同定するための愛着行動が中心になる時期であり、それ以降は愛着行動に対して応答する特定の他者に分化した反応を示す時期とされ(Bowlby, 1969)、遠藤(2005)は、これについて“能動性”を増大していくプロセスであると指摘している。つまり、生後6か月未満のSの「人とのかかわり」の対象の中心が、その〈能動性〉や〈受動性〉にかかわらず担当保育者であることは、Sが担当保育者とのかかわりによって一対一の親密な関係を深めている過程そのものであると考えられる。また、〈能動的〉なかかわりの対象として[不特定の他者]の他者がある一定の割合を占めることも、Sが周囲に〈能動的〉に関わることで愛着対象を同定し、定めようとしているものと考えられることができる。

また、発達と「人とのかかわり」の関係については、【エピソード9】からも興味深い示唆が得られる。

【エピソード9】(ID93-5 月)

いろんな感情も生まれているようで、「えっ、Sちゃんどうしたの?」と思うようなげんそうな顔をしていたりします。いつもはだいたいっこり!なのですが、小さくてもいろいろ考えているようですね。

このエピソードはSが6か月になる直前のもので、同日の連絡帳で、母親は以下のように記述していた。

【エピソード9と同日の連絡帳に母親が記述した家庭でのSの様子】(エピソード9と同日のSの母親による記述(生後5か月27日目))

お兄ちゃんがバウンサーのうしろに回っていないいないばあをして遊んでくれましたが、右と左のどちらから顔がでてくるのかわからないのが不思議なようで、とても楽しそうでした。

記述内容や、保育者のエピソードがその日の連絡帳の冒頭に書かれていたことから考えると、エピソード9は、Sの母親によるSと兄の二者の間のやりとりのエピソード

を受けたものであると考えられる。

エピソード9における、「(いろいろ)考えている」という表現は、保育者がSの様子を説明する表現としてはそれまで用いられていない。これまでの分析から、Sは「いつもはにっこり!」である一方、泣いたりぐずったりする時のSは、〈受動的〉であるだけでなく〈能動的〉に「人とのかかわり」を行う存在として担当保育者に見なされていたと考えられる。そして、この日のSの「げんそうな顔」や「いろいろ考えている」は、「人とかかわる」主体としてのSのあり方がさらに変化していることを、母親の連絡帳の記述から保育者が発見したエピソードとして解釈できる可能性がある。

発達の観点から考えても、この時期のSは原初的な感情が一時的感情へと分化していく過程の時期であり(Lewis, 2000)、「げんそうな顔」のようなSがそれまでに持たなかった感情が発信されるようになっていたとしても不思議ではない。また、生後6か月は二項関係が完成し、三項関係に向かいつつある時期で、人とのかかわりが質的に変化しつつある時期である。田中(2014)は二項関係から三項関係の移行期には、生後4ヶ月頃の他者への注意と反応を示す時期、6か月頃の他者とのやりとりの予測やパターン化して認知する時期を経るとしており、これを踏まえた児山(2015)が指摘するように他者の意図をふまえた三項関係的なコミュニケーションの萌芽を保育者が解釈したものと考えられる。

保育者が「げんそうな顔」で、「小さくてもいろいろ考えている」ようになったとSに発達のな変化をとらえたことは、これ以降のSの「人とのかかわり」や、それをとらえ、援助する保育者の援助を質的に変化させるきっかけとなるものとして考えることができよう。

IV まとめと討論

本研究では、生後2か月で入園した0歳児の生後6か月までの連絡帳の記述から、0歳児保育における「人とのかかわり」および「人とのかかわり」についての保育者の視点について検討を行ってきた。連絡帳の記述から抽出された「人とのかかわり」についてのエピソードは、「他者に働きかけられる」かかわりと、「他者に働きかける」かかわりの2つが大半であり、保育者は生後6か月未満という時期のSを、他者からかかわられる存在としてだけでなく、自らかかわる存在としてもまなざしていることがうかがわれた。また、「他者から働きかけられる」と「他者に働きかける」ことが、一つのエピソードの中で同時に語られることが多いことから、他者から働きかけられるSが、それに対して応えようとする能動性を持った存在として保育者にとらえられていることもう

かがわれた。

また、Sの「人とのかかわり」の対象について検討してみると、Sの保育所生活を心身ともに支える役割を担う担当保育者とのかかわりを核としながら、Sと保育所生活を共にする子どもたちとのかかわりについても積極的に記述されていた。また、Sと子どもとのかかわりについてのエピソードを確認すると、2,3カ月では特定の子どもに働きかけられる受動的な存在として記述されていたSが、4,5カ月と月齢が上がると、保育所の子どもたちとともにあるSの様子や、子どもたちとかがわり合う双方向的な関係が記述されるように変化しており、Sの「人とのかかわり」の能動的な側面が積極的にとらえられていることがうかがわれた。

さらにSの「人とのかかわり」におけるかかわりの受動性と能動性について検討したところ、受動的・能動的の両方のかかわりの対象としてもっとも頻繁に記述されていたのは担当保育者自身であると同時に、それ以外の周囲の人々への能動的な働きかけも頻繁に記述されていた。これは、Sが生後半年という愛着対象を同定し、安定的な関係を築いていく時期において、周囲に対して能動的に働きかけながら、そのかかわりの中心となる担当保育者と一対一の関係を深めていることが記述に表れているものと解釈することができる。

最後に、「人とのかかわり」が発達的に転換する時期である生後半年に達する直前の保育者がSの感情や思考の変化や発達について言及したエピソードからは、この時期、保育者がSの発達的な変化に気づくことでこの先のSの「人とのかかわり」および、それをとらえる担当保育者自身の視点と援助の変化を迫られつつある様子もうかがわれた。

現行の保育所保育指針の解説書では、おおむね6か月未満の乳児の人とのかかわりは、生得的に持った人とのかかわりが次第に社会的・心理的な意味を持つものへと変わること、これについて大人が適切に答えることが基本的信頼感につながると説明されている。ここでの「適切に答える」とは、指針でも触れられている通り、応答的にかかわっていくことであると解釈できよう。

「応答」とは、他者の意図を理解して答える、あるいは答えることであると考えられるが、保育における応答的なかかわりとは、子どもの気持ちや意図をそのまま受け入れて応(答)えることではない。保育者には子どもからの働きかけに込められた意図や気持ちを受け止め、子どもの育ちについてのねらいを持ちながら援助することが求められている。生後2カ月から6カ月という人とのかかわりが社会的・心理的なものに変化する段階にあるSの「人とのかかわり」が、保育者の記述の通り、他者からの働きかけに応えようとしたり、自ら働きかけようと

する能動性を持つものとして、客観的にとらえられるかは確かではない。しかし、確かではないものに「人とのかかわり」の“確からしさ”を積極的に意味づける保育者としての視点には、「人とのかかわり」に向けてSの育ちをとらえ、援助しようとするねらいを読み取ることが可能であるし、それこそが保育者の「人とのかかわり」の援助の原点であると考えることが妥当であろう。0歳児保育における「人とのかかわり」についての応答的なかかわりとは、このような保育者の視点によって支えられているものである。

また、担当保育者がSの「人とのかかわり」に能動的な意味付けを行うことを一貫して続けてきた先に、Sの発達的な変化に着目した記述が認められたことは大変興味深い。「人とのかかわり」を支える心理的機能が質的に転換する生後6カ月という時期のSの変化は、それまでの保育者の「人とのかかわり」の視点の変化を迫るものとなろう。保育者は子どもの発達に寄り添いながら「人とのかかわり」についての視点を変化させつつ、その育ちを援助していると考えられるのである。今後は6カ月以降のS自身の「人とのかかわり」の変化とそれに対応した保育者の「人とのかかわり」への視点の変化や広がりをとらえ、0歳児保育における「人とのかかわり」の全体像の記述につないでいくことが課題であるといえるだろう。

文献

- 芦田宏(2003). 領域「人間関係」の考え方 小田豊・奥野正義(編著)保育内容人間関係 北大路書房, pp.17-33.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss: Vol. 1. Attachment*. New York Basic Books.
- 遠藤純代(1992). 保育園の0~2歳児における子ども同士の関係の発達(1): 連絡帳による分析 北海道教育大学紀要第一部 C教育科学編, 42(2), 97-112.
- 遠藤純代(1994). 保育園の0~2歳児における子ども同士の関係の発達(2): 連絡帳による分析 北海道教育大学紀要第一部 C教育科学編, 45(1), 57-72.
- 遠藤利彦(2005). アタッチメント理論の基本的枠組み 数井みゆき・遠藤利彦(編著)アタッチメント 生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房, pp.1-31.
- 古橋紗人子・森宇多子(2002). 0歳児保育における人間関係の実態: タイムスタディーを通して 日本保育学会大会発表論文集, 55, 328-329.
- 古橋紗人子・森宇多子(2003). 0歳児保育における人間関係の実態—タイムスタディーを通して 滋賀女子短期大学研究紀要, 28, 59-70.
- 古橋紗人子・森宇多子(2003). 0歳児保育における人間関係の実態: 短時間勤務保育士の参加における 日本保育学会大会発表論文集, 56, 268-269.

- 古橋紗人子・森宇多子 (2004). 0歳児保育における人間関係の実態—新設の分園における短時間勤務保育士導入の視点から— 滋賀女子短期大学研究紀要, 29, 31-43.
- 林悠子 (2009). 連絡帳の記述に見る保護者と保育者の関係変容過程 乳幼児教育学研究, 18, 121-132.
- 林悠子 (2015). 保護者と保育者の記述内容の変容過程にみる連絡帳の意義 保育学研究 53 (1), 78-90.
- 石川洋子 (2016). 0~5歳児における異年齢児との人間関係の発達的变化: 0~2歳児との関わりに焦点を当てて 文教大学教育学部紀要, 50, 1-9.
- 亀崎美沙子 (2015). 保育士養成課程における「保育相談支援」の教授法に関する検討—保育相談支援の一形態としての連絡帳に着目して— 松山東雲短期大学研究論集, 45, 1-9.
- 児山隆史・三島修治・樋口和彦 (2015) 乳児の共同注意関連行動の発達: 二項関係から三項関係への移行プロセスに注目して 島根大学教育臨床総合研究, 14, 99-109.
- 金子亜由美・松延愛美・小谷宣路 (2012). 5歳児を対象とした「友達との関係」に関する聞き取り調査 (第2報): 保育内容としての「人間関係」を考える 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 11, 47-54.
- 剣持 安里・山内 紀幸 (2005). 保育者と保護者の連携: 0歳児? 2歳児の連絡帳のメッセージ分析を通して 山梨学院短期大学研究紀要, 26, 43-53.
- 岸正寿・戸田大樹・荒木由紀子 (2017). 保育内容「人間関係」の指導法に関する一考察 教育学論集, 69, 109-127.
- Lewis, M. (2000). "The Emergence of Human Emotions". In M. Lewis & J. M. Haviland (Eds.), Handbook of Emotions. Guilford Press, pp. 223-235.
- 丸山良平 (2007). 保育園0・1歳クラス児の仲間関係と保育者援助の実態 上越教育大学研究紀要, 26, 331-343.
- 丸山良平 (2008). 保育園3歳クラス女児ミホの幼児と保育者とのかかわり 上越教育大学研究紀要, 28, 65-74.
- 丸山良平 (2009). 保育園3歳クラス女児ミホの幼児と保育者とのかかわり 上越教育大学研究紀要, 28, 65-74.
- 松延愛美・金子亜由美・小谷宣路 (2011). 5歳児を対象とした「友達との関係」に関する聞き取り調査: 個人・グループ・学級全体を幼児はどのように捉えているか 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 10, 51-58.
- 森本 美絵・加用 美代子 (2015). 0歳児保育において連絡帳で何がかわされているのか: 連絡帳の意義・再考に向けた探索的研究 京都橘大学研究紀要, 42, 73-90.
- 森田満理子 (2008). 保育内容「人間関係」に関する研究: 4歳児の積み木遊びに焦点を当てて幼児が周囲とのかかわりを広げていく過程を捉える 川口短大紀要, 22, 135-151.
- 永野泉 (2007). 保育内容「人間関係」に関する研究の動向—日本保育学会の研究発表を中心に— 淑徳短期大学研究紀要, 46, 33-42.
- 南陽慶子 (2017). 保育内容「言葉」に関する研究の動向と性質 こども教育宝仙大学紀要, 9, 13-23.
- 西脇二葉 (2006). 家庭と保育者との連携における連絡帳の役割に関する研究: 保育園児の人間関係に着目して 武蔵野短期大学研究紀要, 20, 203-209.
- 汐見稔幸 (2008). 日本の幼児教育・保育改革のゆくえ: 日本の質・保育を問う知的教育 泉千勢・一見真理子・汐見稔幸 (編著) 世界の幼児教育・保育改革と学力 明石書店
- 高杉展 (2009). 連絡帳という記録をどう読み取るか 保育学研究, 47(2), 248-250.
- 田中信利 (2014). 学習到達度チェックリストの「発達段階の意義」に関する一検討. 北九州大学文学部紀要, 21, 1-14.
- 横山文樹 (2008). 幼稚園における子どもの「人とのかかわり」に関する考察(1)—領域「人間関係」の意義と課題の追求 学苑, 初等教育学科子ども教育学科紀要, 812, 27-40.
- 横山文樹 (2009). 幼稚園における子どもの「人とのかかわり」に関する考察(2): 子どもの「精神発達」と保育者の「援助」の関係 学苑, 824, 52-61.

謝辞

本研究にご協力くださったH保育所の園長先生と担当保育者のM先生、職員のみなさまに心より感謝申し上げます。

〈注〉

- 1) 永野は「『人間関係』に関する研究発表と考えられるものでも、ほかの分野で発表されているものもあると推測される(中略)上記の点を考慮したとしても、保育内容人間関係の研究発表は多いとは言えない」としている。特に保育所保育指針における乳児の領域の扱われ方から考えても、永野の指摘と同様の可能性はあると考えられる。ただし、永野はその点を考慮しても領域「人間関係」の研究状況は決して活発とは言えないとしている。
- 2) Sの入所は2カ月の終わりであったため、3カ月とひとまとめにして扱った。